

若い読者の

ための

短編小説

案内

村上春樹



文藝春秋

若い読者の
ための
短編
案内

村上春樹

江別工業学院図書館蔵書章

若い読者のための短編小説案内

1997年10月10日 第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者 村上春樹

発行者 和田 宏

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3の23 千102

電話 03-3265-1211

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

©MURAKAMI Haruki 1997

ISBN4-16-353320-6 Printed in Japan

万一、乱丁落丁の場合は、送料当方負担でお取り替え
いたします。小社営業部宛お送り下さい。

目次

庄野潤三「静物」	123
安岡章太郎「ガラスの靴」	91
小島信夫「馬」	53
吉行淳之介「水の畔り」	23
まずはじめに	7

丸谷才一「樹影譚」……………157

長谷川四郎「阿久正の話」……………191

あとがき……………238

付録 読書の手引き……………245

装幀
渡辺和雄

若い読者のための
短編小説案内

まずはじめに

最初に申し上げておきたいのですが、僕は実を言うとこれまでの人生の大半にわたって、日本の小説のあまりよい読者ではありませんでした。十代のはじめから二十代、三十代にかけて、だいたいにおいて外国の小説を読む、それも多くの場合英語でそのままがりがり読むという体験を通して、日本語の文章の書き方を自分なりに確立してきた人間です。これは日本語で小説を書く日本人の小説家として、正統的な文章体験だとはとても言えないでしょう（奇形的とまでは言わないにしても）、おかげでとりあえずの自己文体確立にいたるまでに、ある程度遠回りをせざるを得ませんでした。しかし良い悪い、正しい正しくないは別にして、何かの加減でそういう、ひととはちょっと違った道を僕は歩んでしまったわけです。そのあいだまったく日本の文学を読まなかったというわけでもなくて、ときにふれて――た

とえばそうする必要に迫られたり、誰かに強く勧められたり、あるいはほかに読むものが手元にないようなおりに——手には取ったのですが、その数は僕の読んだ海外の小説に比べるときわめて少ないものでしたし、また選択も恣意的というか行きあたりばったりで、現代文学に関しても、古典に関しても、とても系統的な読書と呼べるような代物ではありませんでした。

なぜ僕が日本の小説に心惹かれなかったのかという原因、理由について細かく具体的に説明し始めるとかなり長くなるので、ここでは省略しますが、要するに基本的には、その当時の僕が日本の小説の文体や視点や主題の据え方にうまく馴染めないものを感じたということなのだろうと思っています。おそらく生理的に。別の言い方をすれば、僕がたまたま求めていたものを日本の文学はたまたま提供してはくれなかったということになるかもしれません。巡りあわせが悪かったんですね。とにかくそんなわけで、自己形成期を通じて僕は、日本の小説を読んで心を動かされたり、胸を打たれたりした経験を一度も持ちませんでした。また日本語の文章を書くための指標としての、つまり「ロールモデル」としての、特定の小説家を持たなかったわけですから、僕の中には「小説を書きたい、小説家になりたい」という発

想はなかなか生まれてきませんでした。自分が小説を書きたがっているという事実にはっと気づいたのは、ずっとあとになってからでした。おそらく十代の僕は当時の日本の小説が語ろうとしているものとは、まったく別の方向を向いて、別のことを考えて生きていたのだらうと思います。

それでもある程度年をかさねるうちに、面白い優れた日本の文学にもいくつかめぐり会うことはできました。だから決して意固地になって「日本の小説なんか読むものか」と考えていたのではありません。僕は僕なりに、日本の文学に対して——少なくともそのある部分に対して——敬意を抱くようになったと思います。しかしある地点まできたときに（それは自分でものを書き始めたころだと思うのですが）、僕はふとこう思ったのです。「もうせっかくここまで来ちゃったんだから、いっそのことこのままずんずん先に行ってみようじゃないか」と。つまり意識的に日本の文学を自分から遠ざけておくことによって、自分の文章スタイル（そしてその先にある小説のスタイル）を徹底してオリジナルなものにしてみるのも面白いんじゃないかということですね。今ここにある自分の偏った読書傾向、教養体験をそのままのかたちで保持し、より深く追求していくことによって、その結果小説家としての自分

がいったいどのような地点に行き着くのか、それが知りたかったということになります。一種の好奇心です。僕はそんな風いろんな局面で、自分の精神や身体をひとつの実験室ラボラトリーとして捉える傾向がどうもあるようです。それも長時間をかけてあるひとつの傾向習慣を、もう取り返しがつかなくなるくらいまで深く持続させることに、すごく関心があるらしい。それがはたして人間として健康的な性行であるのかどうか、僕にはわかりません。人間として健康的な性行なんてものがはたして存在するのかどうかさえ、僕にはわかりません。でもたとえ世界中の人々に非難されても首を傾げられても、僕にはそれ以外の生き方がなかなかできないのです。それにだいいち、僕がその賭金としてテーブルの上に積んでいるのは、僕自身の時間と労力と、人生の可能性なのですから、これはやっぱりあきらめてもらうしかあるまいと、僕としてはまあ思うのです。

でも四十歳を過ぎて少ししたところに、「そろそろ僕も日本の小説を系統的に、腰を据えて読み始めていいんじゃないか」と自然発生的に考えるようになりました。そのころには僕も小説家として五冊か六冊の長編小説を発表していましたし、自分なりの日本語の文章スタイル

ルも——かなりのどたばたの末に——とりあえずは固まってきました。自信ができたというほどのことでもありませんが、「まあここまで来れば、少しくらいまとめて日本の小説を読んでも、それで僕の文体が大きく揺らいで、困ったなこれはどうしようか、というようなこともあるまい」と思ったわけですね。そしてまたおそらく、僕は僕なりに新しい種類の刺激を本能的に求めてもいたのでしょう。ここであらたに日本の小説を読んでいくことによって、僕も、僕の書く小説も、これまでは見えなかった新しい領域のようなものを見いだせるのではないか、あるいは少なくともこれまでとは違った可能性をみつけられるのではないだろうかと、そこで感じたのだと思います。長い個人的な文体上の実験がようやくここで一段落したのだ、という言い方もできるかもしれません。

それから僕が日本の小説に興味を持つようになったもうひとつの理由として、四十歳になる少し前から僕が日本を出て、外国に住みはじめたということがあります。外国に出るようになったそもその理由は、外部からのさまざまな雑音を遮断して、集中して長編小説が書きたかったということです。日本の文学をめぐる現実的な諸事情について、僕はあまり批判的なことを口にしたくありませんが、「今の日本の社会は、作家がゆっくりと時間をかけて、

精神を集中して、ひとつの作品を熟成させるのには、構造的に向いていない」というのはおそらくだれの目にも明らかな事実でしょう。

それとてにかく、八十年代後半から断続的に、僕は七年くらい日本を離れて暮らしていたわけです。そしてやはり外国に住んでみると、自分が日本人であるということをいやでも認識するようになる。日本にいるときには、自分が日本人であるという認識なりアイデンティフィケーションはほとんどの局面において不要なわけですが、外国に住むと否が応でもそれをつきつけられることになる。日本とは何か日本人とは何かという自己定義がないとうまく自分をやっていけない。いくら俺は独立した個人なんだ、日本の文学とは関係なしに生きてるんだと思っても、自分が日本人の作家で、日本語で小説を書いているという客観的事実に日々まざまざと直面しなくてはならないわけです。そしてまたそういう状況の中で、喉の渴いた人間がグラスの水を求めるように、自分がごく自然に日本の小説を読みたいと感じていることを、僕はありありと認識するようになったのです。だから日本に帰るたびに、熱心に日本の文学作品を買い込んでいくようになりました。

ただ、日本の小説ならなんでもいい、なんでもすんなりと受け入れられるようになった、